

ドイツ・テュービンゲン市のバオゲマインシャフトによる 住宅地開発における共用空間計画の特徴

Planning Methods for Common Spaces in the Residential Development
by "Baugemeinschaften" in the City of Tübingen, Germany

○羽柴優¹, 鄭弼溶²

HASHIBA Yu, CHONG Pilyong

This research is exploring the planning methods for the common spaces of the residential development by the housings of "Baugemeinschaften (joint building ventures)" in Tübingen, Germany. As a result we found that the Planning realizes:

- 1) flexible common space which provides also individual space, through concrete discussion in user-participation about a balance between common and individual using.
- 2) not only selective contacts but also spontaneous contacts which could be occurred by individual spaces.
- 3) various forms of social contacts in a residential area through different selective/spontaneous contacts with different interacts from private to public in each common spaces with other three-scales(House-Block-Residential area).

キーワード：住宅地開発、ドイツ、住民参加、共用空間計画、交流

Keywords: Residential Development, Germany, User Participation, Planning of Common Space, Interaction

1. 研究の背景と目的

都市生活は人々に様々な形態の交流をもたらすが、一方で生活単位の個人化や希薄な地縁により近隣関係を築けずに孤立する問題もある¹⁾。

ドイツでは同じ生活興味や居住形態（単身者世帯や単親家族、DINKs、パッチワーク家族など）を持つ者たちのバオゲマインシャフト（建設共同体を意味する。以下BGsと表記）によるコーポラティブ形式の都市型居住のトレンドが1990年代より見られる。各自治体はこれを活用して都市内住宅地開発を各地で展開しており、自由設計や経済的な都市居住だけでなく、計画を通じた近隣との良好なコミュニティ形成の実現を利点として強調している²⁾。

日本におけるこれまでのコーポラティブ方式の実践は単独の住棟や小規模の戸建住宅地に限られ、まちづくりに発展する実践は少ない。そこで本稿ではドイツにおいてコーポラティブ住宅群による住宅地開発の先進的事例として位置付けられる^[1]テュービンゲン市南区の開発を

対象にする。テュービンゲン市南区の開発は、一貫した用途混在、細分化された開発区画、ソーシャルミックスおよび機能的な多様性によって社会的交流の生まれる都市的空間を形成している点が評価されている³⁾。この開発は小規模なコーポラティブ住宅群によって街区を形成し、住棟近傍から住宅地内の公共空間に至る様々な空間を住民と共に計画する仕組みが特徴的である。本稿では特に住棟から住宅地内の公共空間に至る様々な共用空間に着目し住民参加による計画と利用管理との関連性を考察することで、コミュニティ形成を促しているテュービンゲン市南区開発の共用空間計画の特徴を明らかにする。

2. 研究の位置づけ

都住創の一連のコーポラティブ住宅の研究⁴⁾や延藤によるユーコートの研究⁵⁾を筆頭に国内のコーポラティブ住宅でのコミュニティ形成を対象にした研究は数多く存在するが、その研究対象は单一の組合で構成された事例である。本稿ではその発展形として何十もの組合が複合して住宅地を構成している国外の実践に注目して、この

*1 神戸大学大学院工学研究科 大学院生

*2 株式会社いるか設計集団、早稲田大学人間科学部招聘研究員、博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Eng., Kobe Univ.

Team Zoo Atelier, Adjunct Researcher of Waseda Univ., Dr. Eng.

構成におけるコミュニティ空間の特徴を把握する点で有用である。

ドイツの BGs を活用した都市開発に関する日本での既往研究には、フライブルグのエコ住宅地計画で住民と行政の協働を促した組織のあり方について考察したもの⁶⁾、BGs の一般的な状況とハンブルグ市の取り組みについて都市政策的視点から紹介したもの⁷⁾がある。研究対象地に関する既往研究では、南区の開発地区であるフランス地区内居住者であり建築家のギュチョウ(Gütschow)ら⁸⁾によるチュービンゲン市の地区開発における共同住宅内の共用空間に対する居住者評価のアンケート調査がある。ここでは評価や利用状況に関する特徴と問題点が明らかにされているが、空間デザインとの関連性にまで言及されていない。本稿は独自のインタビューにより、居住者評価の高い事例において、参加により計画された空間と利用内容の関連を含めた考察により、共用空間計画の特徴を把握しようとするものである。

3. 研究の対象と方法

3-1. 対象地区

チュービンゲン市南区ではフランス軍駐屯跡地や企業の未利用地を利用し、1995年より2016年まで6つの地区が開発された^[2]。その中でもフランス地区とロレット地区（表1）は地区内で初期に開発され、住棟内のみならず街区や公共外部空間の計画にもユーザーが参加した実験的プロジェクトという点でモデル性が高い。本稿ではこの二地区の共用空間を検証した。

表1 調査対象地区の概要^[3]
(出典:参考文献9より筆者訳出及び加筆)

	フランス地区	ロレット地区
開発時期	1995-2012年	1995-2012年
面積	11.9ha	6.9ha
人口	2329人	905人
BGs (=コーポラティブ住宅棟数)	86組	45組
BGsを構成する世帯数	1-5世帯 6-10世帯 11-15世帯 16-世帯	38組 32組 9組 7組
		14組 20組 7組 4組

3-2. 共用空間の類型

二地区内の共用空間は特徴的な中庭型街区の街並み構成を持つ⁹⁾。そのため共用空間は、表2のように開発規模に沿って住棟スケール、街区スケール、住宅地スケールに分類できる。本稿では開発全体としての共用空間計画の特徴を把握するため、それぞれのスケールより調査対象を選定した。

表2 共用空間の分類(出典:参考文献9より筆者作成)

開発規模	共用空間	主な利用者	施主
住棟スケール	廊下、屋上テラス、コモンルームなど	住棟内住民	1 BGS
街区スケール	中庭	街区住民	街区を構成する全BGS、中庭に面する施設
住宅地スケール	広場、通り	市民	市

3-3. 事例調査の概要

本稿では、計画経緯と利用管理内容についてできる限り詳細な情報を得ることで、共用空間計画の特徴把握にアプローチする。そのため、居住者評価が高く、よく使われ、交流が多く見受けられる良事例に絞って居住者および設計者へのインタビュー調査を行なった。インタビューはインタビューが多くエピソードについて自然に語れる雰囲気を作るため、著者本人がドイツ語で行なった。良事例の選定は2011年8月にフランス地区の86住棟のうち73住棟、ロレット地区の45住棟全てを訪問し各住棟で住民にヒアリングを行なった際に、居住者が共用空間について肯定的な評価をもって説明した事例や、視察を薦めてくれた事例を「高評価」と判断し、インタビューの対象とした。

選定した調査事例とインタビューは表3のとおりである。

表3 インタビュー調査事例、調査日およびインタビューアー

調査事例	調査日	インタビューアー
[住棟スケール]		
事例1) 廊下	2011.12.20	住民兼設計者(30代男性)
事例2) 屋上テラス	2012.1.16	住民(50代男性)
事例3) コモンルーム	2012.1.30	住民(30代女性 母子家庭)
[街区スケール]		
事例4) 共用中庭	2012.1.16	こども園園長(50代女性)、設計者(40代女性)
[住宅地スケール]		
事例5) 広場	2011.10.31	設計者(40代女性)

3-4. 考察の方法

事例調査のデータから各共用空間の利用内容を人付き合いの属性から分析し、特性を把握する。次にその特性に対する計画への住民参加の影響と共用空間の段階的構成による影響を考察し、チュービンゲン市南区の開発における共用空間計画の特徴を整理する。

4. 共用空間の計画経緯と利用実態

4-1. 住棟スケール

4-1-1. 廊下

事例1) ミストラル通り1(フランス地区)

共有世帯数: 7 (屋根階のみ住居)

その他の共用施設: なし

計画経緯: このBGsは幼い子供を持つ世帯で結成され

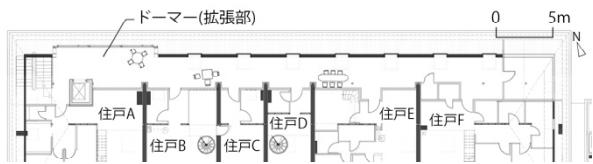


図1 平面図



図2 廊下の拡張部を利用した隣人・知人とのパーティー

た。既存建物を改修

し屋根階を共同住
宅とした際に、北
側の幹線道路の騒
音を和らげるため
に、北側に廊下を
配置した（図1）。
防音のため廊下は
そのまま屋内とし
たが、勾配屋根と
の三角形の断面に
より、廊下とし
ては低いスペースも
併せると、結果的
に幅の広い空間が



図3 子どもの遊び場としての廊下

生まれるのでそのまま活かし、様々な使われ方ができる
共用空間をイメージして計画した。例えば、元は三角形
断面の廊下空間を、イベントで使用できるように階段と
EVの前のスペースには大きなドーマーを設け、光の入
る大きな空間へ拡張した。この共用部のアイデアは自ら
居住者であった設計者から提案された。

管理／利用：子ども達の遊び場（図3）や卓上サッカー、
あるいは食卓を玄関先に出してゲストを招いた食事の場
として利用されている。また、隣人、知人を招いて映画
鑑賞会やパーティーの場（図2）として利用している。

4-1-2. 屋上テラス

事例2) アイシャー通り5(フランス地区)



図4 屋上テラスと周囲の菜園



図5 隣人・知人とのパーティー

共有世帯数：9

その他の共用施設：なし

計画経緯：この BGs は
子育てを終えた夫婦世帯
によって構成され、草い
じりを行いたいという共
通の興味があった。地区
詳細計画による建物高さ
制限で建物の南側を北側

よりも低くする必要があったため、居住者からの提案で
低くなる南側を屋上テラスとして利用することにした。
そして、フランス地区内がかなり建て込まれて緑が少な
いことからこの屋上テラス周りに居住者用の小さな貸し
菜園を設けた（図4, 6）。設計者の提案により、大人数での
イベント時でも快適に利用できるよう、そして南からの
過度な日射を遮れるよう屋根を設け、軒先にはカーテン
も取り付け可能にして雨風をしのげるようにもした。計
画の際には、月一回設計者と打ち合わせたほか、他の屋
上テラスの事例もみなで視察した。

管理／利用：草いじりや休憩場所にしたり、ただくつろ
いだりする。その時に隣人と顔を合わせることも多く、

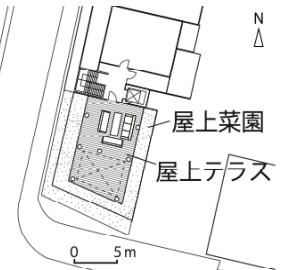


図6 屋上階平面図

世間話もよくする。また、個人的な祝い事、隣人、知人を招いたパーティーにも利用する(図5)。全ての居住者が屋上テラス扉の鍵を持っている。イベントで使いたい人は扉脇にあるリストに記名し、先約順で利用する。菜園は、ガーデニングをしない居住者にコスト負担をかけないよう、共有物として設えた上で使用者に必要面積をレンタルする形式としている。

4-1-3. コモンルーム（二つの BGs による共用）

事例3) ゲルツ通り8とルスマルクス通り10(ロレット地区)



図7 コモンルーム



図8 付属キッチン



図9 中庭に続く
コモンルームの配置

共有世帯数 : 20

住棟内その他共用施設 : ジム兼音楽室

計画経緯 : 子連れ夫婦世帯と高齢者世帯から成る BGs(12世帯)と母子家庭世帯で構成された BGs(8世帯)による二つの BGs (計 20世帯)により一つのコモンルームを共有する事例である。コモンルームの提案は設計者からであった。居住者からは自分たちの子供を遊ばせられるスペースであること、バーカウンター付きのキッチンや卓球台の設置、パーティールームとして使えるこ

とといった要望があった(図7,8)。中庭に面しており、中庭と一体的に使えるのもこの部屋の特徴である。

管理／利用 : 誕生日や子どもたちのお祝い事を催す場や、卓球場、子どもの遊び場として使っている。また隣人、知人を招いて映画鑑賞会や共同住宅内の大晦日のパーティーにも使っている。居住者の使用は無料である。さらに、居住者を介した紹介がある場合に限り、セミナーやパーティーなど外部の利用者にも貸し出している(5ユーロ/回)。イベントルームの利用者リストに記名し、先約順で利用する。コモンルームの鍵は、全ての居住者が所持しており、いつでも気軽に立ち寄れる。

4-2. 街区スケール : 共用中庭

事例4) Block12 の中庭(ロレット地区)

共有者 : 72世帯 (共同住宅10棟) +市立の子ども園

街区内地域共用施設 : 住棟の EV、子ども園屋上の多目的室

計画経緯 : 街区の居住者と市の都市整備局、市の子ども園担当部局の3者で中庭建設委員会が組織され、コンペによる設計者の選定、中庭の計画、デザインと遊具の決定に街区住民が参加した。この街区は居住者グループを募る前からモデルプロジェクトとして、子ども園と街区内の住民で中庭を共有することが地区詳細計画で決めら



図10 横円形の共有庭



図11 周辺の子どもたちの遊び場である

れていた。毎回の設計者との打合せは街区内の全住民が参加可能であった。

(毎回の打合せには約15人が参加。)ただし、将来の子ども園の運営者は未定で参加できず、子どもたちにも参加機会はなかった。計画時の参加者との打合せで現れた主

な要求は、都市的で静かな広場でありながら子どもの遊びも受け止められる場所、また設置する遊具は子ども園の園児だけでなく街区に住む少し年上の子どもたちも遊べるものにすることであった。これを受けた設計者は共用庭を楕円形とし、その周辺の一段高い緑地と緩やかに分けて、園児の遊び場としても住民の共用庭としても機能することを提案し(図10,11)、明快な構成が全ての参加者に気に入られて実現した。楕円形広場の遊具は一直線に並べることで、その周囲は大人も利用する都市的広場としての雰囲気を保つようにしている。

管理/利用: 子ども園からは遊び場やイベントの場として使われ、街区の居住者からは私有庭から少し共有庭の楕円形周りまではみ出してイベントやガーデニングに使われている(図12)。遊具のある楕円形の広場、周辺の子どもたちの遊び場としても使われている。また共用庭は周辺住民へも開放されており、周辺住民が訪れ休んだり街区住民とおしゃべりをする等、公園的にも使われている。楕円形の広場と遊具は子ども園によって管理され、周辺の緑地部分(私有庭部分を除く)は、子ども園と街区の居住者両者によって管理されている。管理方法に関する話し合いの場は年に一回持たれている。共有庭を街区外住民が通ることは認められている。

4-3. 住宅地スケール: 広場

事例5) フランス広場(フランス地区)

利用者: 市民

その他の共用施設: なし

計画経緯: 公共施設であり、設計者は市の指名により決定。チュービンゲン大学のスポーツ科学研究所の主導により、市民参加で進め、計画の要点を作成。主要な参加対象者には住宅地内のみならずその周辺住民も含まれた。コンセプト作成のWSでは、参加者は高齢者、女性、障害者、事業経営者、子を持たない親の5つのグループに分けられ、意見を求められた。WSにまとめられた要点

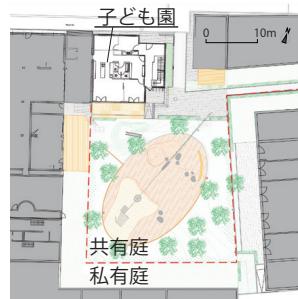


図12 中庭における私有庭と
共用庭の緩やかな線引き



図13 元戦車庫を利用した屋根付きの遊び場と前庭



図14 前庭での水遊び

は、多目的な利用に応える広場、土地の歴史性への配慮、この地域に元から住んでいる高齢者や移民の利用への配慮、まちへの見晴らしの良い広場、フランス地区の象徴的な場所となること。空間の特徴としては、かつての駐屯軍の戦車の車庫の壁を取っ払った半屋外空間とすることで、雨の日でも遊べる屋根付きの場とその前の広いスペースと水場からなる見晴らしの良い広場としたことがあげられる(図13,14,15)。

管理/利用: 子ども達の遊び場、子どもを連れてきた親達の交流の場、市や団体の大きなイベントの場として利用されている。管理は市の責任となっているが、計画に参加した市民が自主的に草木のメンテナンスやゴミ拾いなどを行っている。レストランにも面し、常に人が居る。

5. 考察

5-1. 共用空間における個別的領域

各事例における共用空間の利用内容を、空間の段階的構成と、プライベートからパブリックへ至る人付き合いの段階^[4]に則って図16のとおり整理した。特徴として、

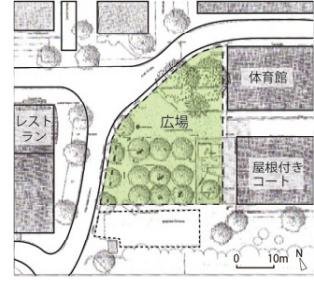


図15 広場配置図

		人付き合いの段階性	テーマ的	私・家族、知己	住棟内住人	友人	知人・サークル	他者
空間の段階性		プライベート	地縁的	住棟内住人	街区住人	街区住人	住宅地内住人	住宅地外
住棟	廊下		■玄関前で食事 ■子どもの遊び場 ■卓上サッカーフィールド		□映画鑑賞会 □隣人・知人とのパーティー			
	屋上テラス		■ガーデニング ■休憩場所	■個人的なお祝い		□隣人・知人とのパーティー		
	コモンルーム(2BGS共用)		■卓球場 ■子どもの遊び場	■BGS内 ■大晦日パーティー	□映画鑑賞会 □誕生日会		□貸室(セミナー等)	
	街区共用中庭		■ガーデニング ■個別的なパーティ(私有庭の延長) ■子ども園の園庭		■BGS内 ■大晦日パーティー ■街区内BGSのお祭り		□周辺の子どもたちの遊び場 □周辺住民も休める庭	
	住宅地広場		■草木の管理			□子どもたちの遊び場 □子連れの親の交流	□市・団体のイベント	

■：1住戸（個人または家族）もしくは1施設の個別利用 □：所有者の共用利用 □：所有者以外との共用
 ：個別的領域

図 16 空間別、人付き合いの段階別に見た共用空間の利用内容

どの事例においても個人または家族等による個別的な利用がなされている。この個別的な利用がなされている空間を個人や家族（住戸単位）の生活領域として、共用空間における「個別的領域」と呼ぶことにする。

事例 6 <広場>では、住民らの自主的な草木の手入れも個人の領域として認識されることによる現象と捉え、個別的利用として取り上げた。

5-2. 個別的領域での自然発生的な交流

各事例のヒアリングで興味深い点は、共用空間における個別的領域が隣人との自然発生的交流の場となっていることである。

事例 1 <廊下>では、アクセス路であることから人の往来も多く、子どもを玄関先で遊ばせている時や玄関先での食事の際に、通りかかる隣人と挨拶や会話が行われる。事例 2 <屋上テラス>では、自らの菜園の手入れをしていると、夕涼みに屋上へ出てきた住棟内の隣人とばったり会い世間話が行われたりする（図 17 左）。事例 3 <コモンルーム>でもヒアリングの際、インタビューアが子どもを遊ばせていたが、途中から隣人も子どもを連れて遊び、会話に加わってきた。事例 4 <中庭>では、園児らが中庭で遊んでいると、横でガーデニングをしてい

る街区内住人のおばあさんと話を始めたり、そのおばあさんが広場と緑地の段差に腰掛けて休憩していた街区外の住人と世間話を始めたりしていた（図 17 右）。事例 5 <広場>では、残念ながら調査中に自主的な草木の手入れが住民間の自然発生的な交流の契機となっているか確認できなかった。

5-3. 共用空間の段階的構成による影響

また共用空間の段階的構成に着目すると、住棟内共用空間において住棟内隣人と、街区内共用空間において街区内隣人のみならず、街区外隣人との交流の場になっている。図 16 を再度見ると、個別的利用以外の共用における交流は全て交流相手が選択的で、その相手とのつながりもテーマ的である。一方で、交流相手とのつながりは住棟スケールから住宅地スケールへ至るまで、徐々にパブリック性を帯びながら変化していく。従って上記の個別的領域が自然発生的交流を生み出すことで、結果的に居住者が住宅地内でプライベートからパブリックに至るあらゆるタイプの相手と様々な交流を持つことを可能にしている（図 18）。

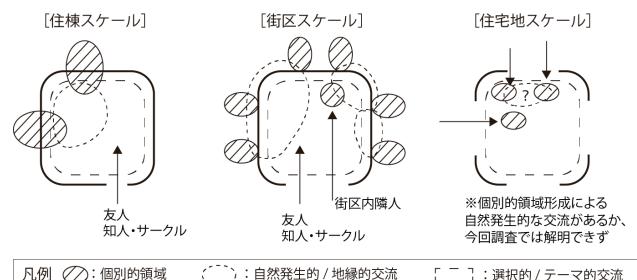


図 18 共用空間における個別的領域と交流の構造

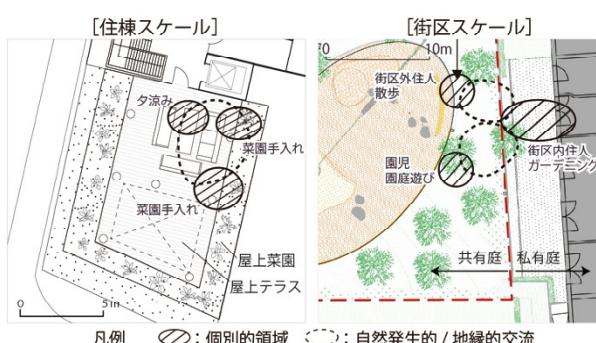


図 17 共用空間における個別領域と自然発生的な交流の様子

5-4. 共用空間における個別的領域の形成手法

これらの個別的領域は、計画段階での利用者の参加により、空間デザインや利用運営についてイメージが議論されることで実現されている。その手法を「空間デザイン」の側面と「運営方法」の側面からまとめたのが表4である。興味深いのは第一に、これら居住者評価の高い共用空間でも、その設置経緯は設計者からの積極的な提案により実現されたという点である（事例1,2,3）。事例2においても、居住者らは当初屋上テラスの機能を個人的な庭としか捉えていなかったが、設計者からの提案でイベント利用などに望ましい屋根が設置された。

第二に、居住者らとの具体的な利用イメージの検討から、利用運営方法の調整とデザインの工夫によって、柵等の物理的管理区分も無しに一体的な空間において部分的な個別的利用を可能にする共用空間デザインを達成している点である。これは個別的領域での自然発生的な隣人との接触を生み出す空間的手法となっている（図19）。

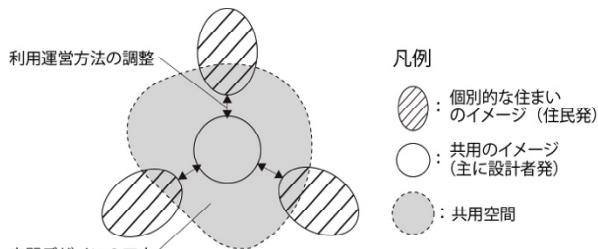


図19 共用空間における個別的利用の調整イメージ

6. 結論

以上より、チュービンゲン市南区でのBGsによる住宅地開発における共用空間計画の特徴を次の4点とした。

- ①住民参加の計画プロセスによって、共用空間を個別的に利用するイメージと共に支障がない運営方法を居住者らが具体的に検討し、個別的にも利用できるフレキシブルな共用空間のデザインへつながっている。
- ②住棟内において、共用空間に個別的領域を形成することで隣人との自然発生的な交流を促す共用空間となっている。
- ③街区レベルにおいても、共用空間と個別的領域の空間的連続性を生み出すデザインとすることで、街区内外の隣人との自然発生的交流を促す共用空間となっている。
- ④住戸近傍から住宅地内パブリックスペースまでの共用空間での交流を総合すると、各共用空間での選択的／テーマ的交流に加え、住棟内隣人、街区内外隣人との自然発生的／地縁的交流を生み出しており、それぞれの規模において交流相手の属性が異なるため、結果として住宅地内に多様な交流形態を実現している。

謝辞

執筆にあたりご指導を頂いた神戸大学大学院 山崎寿一教授に感謝の意を表します。

注

[1] 2009年にドイツ連邦共和国国土交通・建設・都市開発省が主催す

表4 共用空間における個別的領域の形成方法

事例	デザインによる工夫		運営方法による工夫
住棟 スケール	事例1 廊下	・既存建物の小屋裏階を改修したため生じた三角形断面の幅の広い屋内廊下を生かし、各戸の玄関前にテーブルを出したり、子どもたちが走り回れるスペースをつくった	(特になし)
	事例2 屋上 テラス	・屋上テラスの周囲に菜園用の植栽帯を設け、高密度で緑地の取りににくい住環境においても、身近なガーデニングスペースを各居住者が持てるようにした	・各居住者が屋上テラスへの鍵を持つことで、いつでも気軽に立ち寄れるようにした ・屋上の菜園は共有物とし、居住者へは必要面積をレンタルする形式とし、ガーデニングをしない居住者にコスト負担をかけないようにした
	事例3 コモン ルーム	・子どもたちの遊び場として外に出ても遊べるよう、中庭に面した配置とした。 ・個別的なパーティーも行えるようキッチンとトイレを備えた	・各居住者が屋上テラスへの鍵を持つことで、いつでも気軽に立ち寄れるようにした
街区 スケール	事例4 共用中庭	・中庭中央に楕円形の広場を設け、その周囲を1段高い緑地とすることで、園庭や子どもたちの遊び場としても、緑に囲まれた広場としても機能する ・遊具は一直線に並べることで、その周囲は大人が利用する都市的な広場としての雰囲気を損ねないようにした ・楕円広場の周囲を緑地とし、その周囲の各住棟の私有庭と連続させ、柵も設けないことで、共有庭端を部分的に私有庭の延長として利用できるようにした	・楕円まわりの緑地部分は子ども園と街区内外BGSによって管理し、管理運用に関する話し合いが年1回行われる
住宅地 スケール	事例5 広場	(特になし)	・市有であるが、住宅地内やその周辺住民が草木の手入れを行うことを認めている

るコンテスト「都市をつくる、都市に生きる」で「統合的で地域的なデザイン」部門で都市計画賞を受賞している。

[2] テュービンゲン市HP:<https://www.tuebingen.de/98.html>(2012年6月時点)より。

[3] BGs世帯数は、本稿における2011年8月の各住棟訪問時にヒアリングを行い把握した。加えて補足的に文献調査を行い、地区内全ての住棟の世帯数を把握した。

[4] 本稿ではテーマ的つながりにおける私から公への段階性を吉阪隆正の提唱した5段階区分の領域を基に設定した。(参考文献10, pp. 59)

参考文献

- 1) 横山俊祐:住まい論、8 地縁居住のカタチと住まい pp. 125-140 ,
日本放送出版協会, 2010.3
- 2) KRÄMER, Stefan, KUHN, Gerd, Wüstenrot Stiftung (Hg.): *Städte und Baugemeinschaften*. Karl Krämer Verlag Stuttgart+Zürich, 2009
- 3) *Südwest Presse Neckar-Chronik* am 27. 6. 2009.
- 4) 安原秀(2003) : 新都住創の都心型住宅、都市住宅学 2003 卷 40 号
pp. 60-61
- 5) 福田由美子、延藤安弘:共有空間と集住生活の相互作用のプロセス評価 -ユーコートの性質とその計画原理(3)-, 同第 444 号, pp. 21-30, 1993.2
- 6) 阿部成治 , 小浦 久子 , 神吉 紀世子, 「学びながら計画したフライブルクの拡大住民参加 : フォーラム・ヴォーバーンの軌跡」, 学術講演梗概集. F-1, 2005, pp. 101-104
- 7) 太田尚孝、エルファディング ズザンネ、大村謙二郎 : ドイツのコ一ポラティップハウス (Baugemeinschaft) を用いた都市再生の実態と課題に関する研究: -ハンブルグ市を事例に -、都市住宅学 2014 (84), pp. 109-114
- 8) Matthias Gütschow: *Gemeinschaftsräume und Gemeinschaftsflächen*: In Gerd Kuhn, Tilman Harlander: *Baugemeinschaften im südwesten Deutschlands*, Stuttgart 2010, pp. 138-141
- 9) FELDTKELLER, Andreas (Hg.) : *Städtebau: Vielfalt und Integration*. DVA, Stuttgart/München, 2001
- 10) 重村力:定住の構造-その生活学的考察と計画論の展開-, 早稲田大学博士論文, 1992